I部 1

③見守り・居場所

⑤地域共同ケア

神奈川県川崎市宮前区野川地区・ボランティアグループすずの会

“気になる人”とともにつくる地域での支え合い

野川地区を中心に活動するすずの会は、住民による地域ボランティアグループとして、自治会等の地縁組織や専門機関と協働し、個別支援を展開し、地域でその人らしく生きることへのまちづくりに取り組んでいる。住民の立場で活動するすずの会では、支援する側とされる側が固定されないため、支援される側が支援する側になるのが当たり前のように行われる。その循環により支援の輪がより強くなっていく。すずの会は、介護者という当事者性を原点にした市民活動である。

●宮前区の概要

多摩川右岸に沿ってさかのぼるように連なる区部はベッドタウンである。宮前区も里山が開発されて 1970 年代から相次いで宅地が開発されてきたが、緑の多く残る土地である。

■人口：220,456

■世帯数：95,043

■高齢化率：15.94%　　（2011.10 現在）

野川地区

40 年前に電鉄会社が開発した住宅街として急速に発展。野川西団地は 5 割以上が 60 歳以上の高齢者世帯。

■人口：28,377 人

■世帯：11,624 世帯

■高齢化率：約 19.2%　　（2011.10 現在）

10年間の在宅介護経験から自発的に生まれたすずの会

在宅生活支援ボランティアグループ「すずの会」は、介護経験のある鈴木恵子さん（65歳）とPTA仲間5人によって、1995（平成7）年に生まれた。以来、高齢者、障害がある人、介護家族など地域住民の身近な相談窓口として、公的サービスだけではとうてい不可能な個別支援と地域づくりを続けている。

在宅介護サービスがまだ浸透していなかった1980年代、鈴木さんは30歳代後半から10年間の介護生活を続けた。介護保険などない時代、母親を自宅で介護する鈴木さんを支えたのは、保健師や病院の看護師たち専門職だけではなく地域の友人たちの力だった。

90年代半ば、日本は高齢社会に突入し、寝たきりや認知症がクローズアップされるようになる。「寝たきりや認知症になったら、地域（家）で暮らせなくなるの？」という周囲の不安に対し、「でも、鈴木さんちではできていたわよね」ということを知っていたPTAの仲間たちが、自分たちの問題としてとらえたことがすずの会の出発点である。「いつでも困ったときは、鈴を鳴らして」という願いを込めて、「すずの会」と名づけた。行政や社会福祉協議会（以下、社協）などの公的機関の支援などは皆無で、まったくの自発性から生まれた。

現在、すずの会のメンバー（ボランティア）は63人、全員ができる範囲で自分の得意なことを活かして楽しみながら活動を続けている。会の目的は「要介護高齢者・障害者とその家族を支援するグループが、ふれあいながら誰にでも優しいまちづくりネットワークをめざし、支援のあり方の研究、実践を行う」（すずの会規約）。会費は年間1,000円、活動費はこの会費のほかに、各種助成金や寄付金によってまかなわれている。

表1　野川セブンの概要

目的	地域ネットワークづくり・介護予防
定例会	毎月第1火曜日　10：00～
参加団体	野川地域でミニデイ・リハビリ教室・介護者の会などの自主活動団体13か所、地域包括支援センター3か所、地区社協、老人会、介護保険事業所（特養、ケアハウス、デイサービスなど）3か所、民生児童委員、町内会・自治会3か所、宮前区高齢者支援課および地域健康担当課
発足当時の野川セブンの7団体： ①すずの会、②③ミニデイ2か所、④どんぐり会（言語障害の人へのボランティアグループ）、⑤お元気会（脳血管後遺症の会）、⑥だるま会（介護者の会）、⑦隙間の生活支援をするボランティアグループ	

（2012.3現在）

情報の共有の必要性から生まれたネットワーク会議

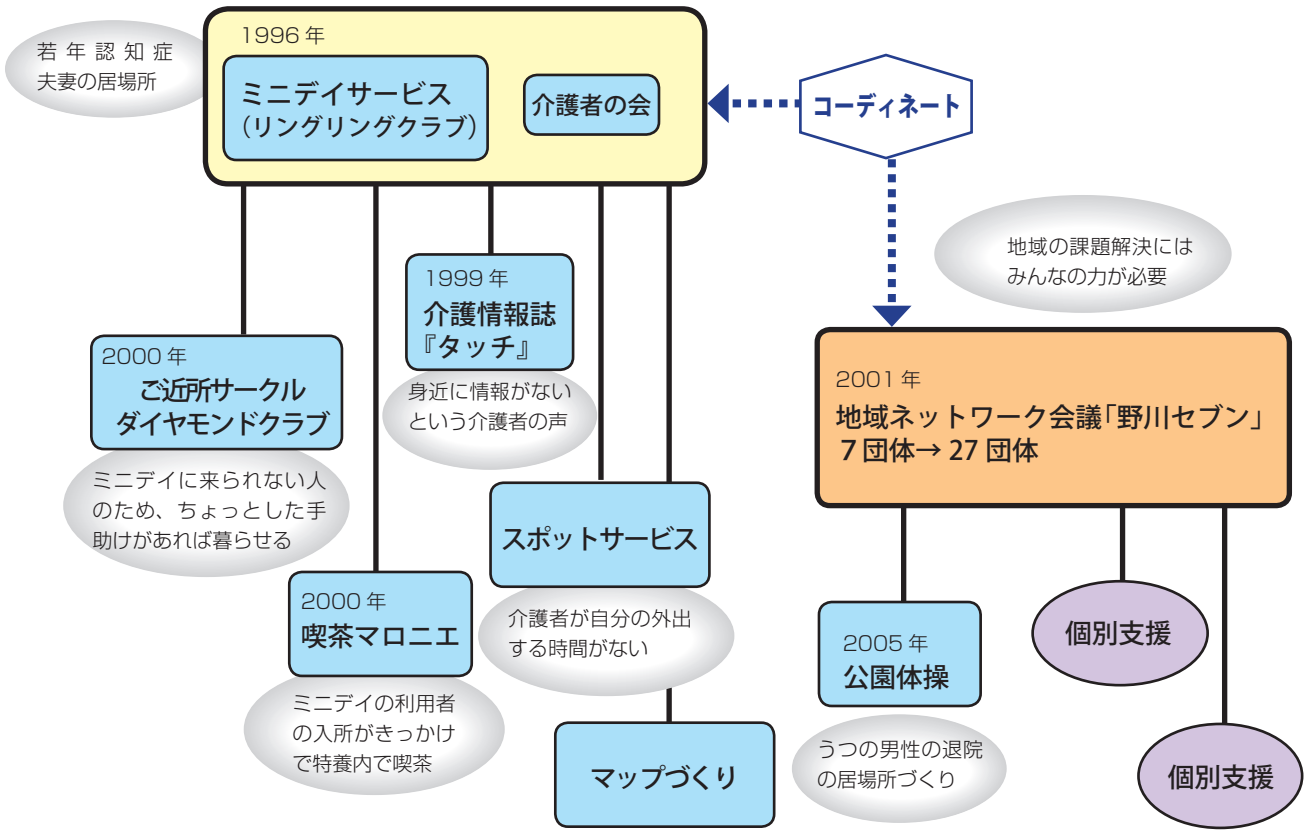
すずの会には、拠点というものはなく連絡先は現在も代表の鈴木さんの自宅である。設立当初、活動を進めるにあたってこだわったことはネットワークの構築だという。2000（平成12）年に、川崎市の住民主体を推進する介護予防事業に手をあげ、野川地区でボランティア活動をしていた7団体で、ネットワーク会議「野川セブン」を結成した。「自分たちにはできないことでも、他の団体なら引き受けられるかもしれない。お互いにそういう情報交換（共有）の場が必要だ」と感じたことがネットワーク会議の設立につながった。立ち上げ当初は、地区社協や民生児童委員等から理解が得られず苦労することもあったが、市と保健所が地域関係団体に呼びかけて説明会をしてくれた。現在も野川セブンは川崎市の「わたしの町すこやか活動」事業として位置づけられ、年間30万円の補助金が出されている。

野川セブンの誕生から10年以上が過ぎ、今では専門職団体や介護保険事業所など27団体が加入する、地域で最も重要なネットワーク会議となっている（表1参照）。専門職にとっても、このネットワーク活動の存在は大きい。2011（平成23）年度は参加グループが4つ増え、ネットワークは着実に広がっている。

すずの会の個別支援に欠かせない“すぐ動いてくれる”医療関係者も、このネットワークでつながることが多い。野川セブンで健康関連のイベントをする際に、「歯の話をしてほしい」「血圧の話をしてほしい」などとつながりたい医師に声をかける。

顔が見えて信頼できる医療機関や介護保険サービス事業所、行政機関と日常的につながっているから、緊急事態が発生したときも、たしかな専門機関へつなぐことができる。「専門職には専門職なりの解決の方法があるし、私たちには住民としてのかかわり方がある。少しずつの力を合わせてその人のためのネットワークをつくってい

図１　すずの会の活動のきっかけと展開



ボランティアグループすずの会

代表：鈴木恵子

法人格：なし

発足：1995 年

ボランティア数：メンバー 60 人　賛助会員 60 人

川崎市宮前区野川 3051-28

TEL044-755-7367

http://suzunokai.com/

活動内容：

高齢者等支援活動

・ミニデイ（毎月第２水曜日・第４火曜日）

・バリアフリーの旅　年２回

・ダイヤモンドクラブ　32 か所（個人宅 32）

・喫茶マロニエ（特養内で月１回開催。第３月曜日）

・スポットサービス（介護保険外の支え合い活動　441 回）

・コーディネート・介護相談（364 回）

地域ネットワーク活動：

・地域ネットワーク野川セブン（月１回　第１火曜日）

・みんな De 体操（６か所の公園等で週１回）

展開：

1995 年　鈴木恵子さんと５人の PTA 仲間で発足

1996 年　ミニデイサービス「リングリングクラブ」

・介護者の会開始

1999 年　介護サービス情報誌「タッチ」発行

2000 年　喫茶マロニエ開始（月１回）

2001 年　野川セブン発足・男性介護者の会

2004 年　ダイヤモンドクラブ開始

2007 年　「タッチ」Ｖ発行

2006 年　公園体操開始

2011 年　住民支え合いマップづくり（厚労省事業）

参考図書：「ご近所パワー活用術」（年友企画）「息子介護」（CLC）「パーソナルパワー活用術」（すずの会）

く。オーダーメイドの支援ネットワークをつくっていくのが私たちのやり方です」と鈴木さん。

たくさんのニーズ発見の場：ミニデイサービス「リングリングクラブ」

活動の柱であるミニデイサービス「リングリングクラブ」（以下、ミニデイ）は、毎月２回（第２水曜日および第４火曜日：10：00 ～ 15：30）「野川いこいの家」で盛大に行われる。毎回スタッフと利用者合わせて 70 人を超える人数が、昼食を楽しみながら、その日の気分や体調に合わせて一人ひとりに合ったプログラムで思い思いに過ごす。利用者は、要介護者もいれば介護保険サービスにつながらない人もいる。障害がある人や子育て中の母親と子どもなど、誰でも参加できる。また、近隣のケアハウスやグループホームから、ミニデイに来る人たち

もいる（逆デイサービス）。また、地域包括支援センターやケアマネジャーから相談されて、ひきこもりがちな人や家族に虐待されていることが疑わしい人など、さまざまな課題を抱えた人がここに来る。人とつながり、心を許し合える関係を築く一歩になるのがミニデイである。

ミニデイは1996（平成８）年、若年認知症の妻を介護する60歳代の夫の「僕と妻が参加できるところがありますか？」というひとことをきっかけに始まった。介護者である夫が家族会に参加している間、数人のボランティアが妻と一緒におしゃべりしながらお茶を飲むことから始まった。今でもにぎやかな広間とは別室で、介護者の会が開かれている。

ミニデイ当日、スタッフはおのおのに準備を始める。昼ご飯の準備、受付、お茶用の紙コップへの名前書き、レクリエーションの準備、送迎など、さまざまな役割がある。利用者が集まってくる直前に、今日の利用者についての情報共有が行われる。ここで、「気になる人」がいる場合は、その人への声かけのコツ、どのような配慮が必要かなど具体的に伝えられる。「気になる人」とは、何らかの支援が必要だと思われる人のすずの会流の表現だ。

10時になると続々と利用者が集まってくる。ボランティアに付き添われて会場に入ると、おのおのに好きなことを始める。おしゃべりや漢詩、ぬりえなどを行って午前中を過ごす。手づくりの昼食を囲んだあとは、誕生会や歌や踊りなどのレクリエーションが行われる。

利用者を見送ったあとは反省会を行う。30人ほどのメンバーがほぼ全員参加する。その日、気になったことが話され、共有される。爪が伸び、ミニデイ中にケアをした利用者のことが話題になると、介護経験のあるメンバーから、巻き爪から壊疽（えそ）になったという話がされた。その実体験をていねいに聞いたあとで、改めて代表の鈴木さんから高齢者の爪のケアの重要性について説明がある。話題は、昼食のメニューや利用者の家族について、はじめて参加したボランティアの様子や利用者見送りの段取りについてなど、多岐に渡る。それぞれが気づいたことを意見交換していくことで、よりよい場づくりがなされていく。

組織化しないことが継続の秘訣

すずの会の会合は、ミニデイが終わったあとの反省会のほかに、月３回の定例会議、イベントの前後の打ち合わせを入れると年間50回にも及ぶ。すずの会には代表はいるがトップダウン型の組織ではない。それぞれの活動も担当制を敷くのではなく、みんなで話し合い、つくりあげる。「非効率な方法だけど、みんなが生活感覚をもち、知恵をもち寄るからいいものができるし、まとまる」と鈴木さんは言う。「こんなことができるとよさそうね」と誰かが発信し、活動が生まれる。そういった「普段の活動を地道に継続させるのがすずの会の大きな役目」だと言う。できることをできる範囲でする。組織になって「これをしなくちゃならない」では、生きいきとした地域活動はできなくなると考えている。何度かNPO法人化の話題が出ることもあったが、「だったら、楽しく活動できなくなるから辞めるわ」という人が多かったという。

厨房ではミニデイの昼食づくり。料理の得意なボランティアの手づくり

ミニデイの午後の様子。この日は、男性によるコーラスが披露された

一人ひとりがスキルアップする

ボランティア活動を継続するうえで、60人のボランティア一人ひとりの特徴をとらえて活動を組み立てることも重要な要素だ。「あなたの得意なことは何？」とはじめて来たボランティアに聞くのだそうだ。料理の得意な人、場を盛り上げるのが上手な人、歌うのが好きな人、車で送迎のできる人などと、ボランティア自身が特技や趣味を生かせる場でもある。

また、個別支援活動を続けるなかで専門スキルが必要になってくることもある。会として資格の取得をすすめているわけではないが、すずの会の活動を続けるうちに、それぞれが自発的にスキルアップを目指すようになった。メンバーは、看護師、介護支援専門員、社会福祉士、介護福祉士、ヘルパー１級・２級、栄養士、薬剤師、体育指導員、整体施術師、折り紙インストラクター、バルーンアート指導者、音楽の指導者など、多彩な資格をもっている。

気になる人を囲んだお茶会「ダイヤモンドクラブ」

ダイヤモンドクラブとは、ミニデイに行くのが困難な人の「集まれる場所がほしい」というニーズに応えて始まった、ご近所単位でおつきあいの輪を広げるお茶会の名称である。開催頻度、人数、内容はそれぞれの事情によって異なるが、現在32のダイヤモンドクラブがある。地域の中で孤立しがちな高齢者、障害がある人、介護者、子育て中の母親など、“ちょっと気になる人と一緒に”というのがルールである。個人宅での開催が多く10人程度が“気になる人”を真ん中にご近所で集まる。認知症の一人暮らしの人を見守るもの、介護保険に結びつかない人を支えるもの、親の介護をするシングル息子・娘が孤立しないようつながるもの、妻亡きあとの一人暮らしの男性を支えるものなど多彩である。

１回の参加費は一人100円、開催者には１回3,000円が出る仕組みだ。昨年度（2010年）は、新しくダイヤモンドクラブを始めた個人宅が３か所増えた。また、長年ダイヤモンドクラブを開催したことでお互いのつながりが深くなり、困りごとがあれば日常的にすぐに集まって解決できるようになったため、今年は開催を見送ったと

津田知充さん（73歳）宅でのダイヤモンドクラブ。一人暮らしがちょっと不安になった高齢者、夫の介護をしている80歳代の女性などが集まる

失語症の夫ともにミニデイに参加
井上かつ子さん

井上かつ子さんは夫が参加するミニデイに、付き添いの家族として参加する。今ではある利用者さんの専属ボランティアとしての役割も果たすようになった。ミニデイは、「夫から離れてリフレッシュできる場所だ」と言う。

井上さんの夫はもともと失語症のどんぐり会に通っていた。３年ほど前に、すずの会のクリスマス会に誘われた。当事者である利用者より先に、まずボランティアさんが楽しみ、会の出しもののときにも、ボランティアが率先してパワフルに踊っていたのが印象的だという。ボランティアの雰囲気と心遣いにすっかりすずの会が気に入った。

介護経験も、人生経験も豊かなボランティアに囲まれて過ごす時間はとても有意義だという。「ミニデイでは何かを言葉で教わることはないけれど、とても勉強になる」という。さり気ない介助の仕方やお昼の献立づくりなどにふれることで、自然に身につくことがたくさんある。

いう地域も出てきている。

ダイヤモンドクラブの発想は、代表の鈴木さん自身がケガをしたときに感じた、「隣近所のちょっとした手助けがあれば」という思いから生まれた。制度による支援でなくても、世間話をする相手がいることやちょっとしたお手伝いをしてもらえたことで、さまざまな問題が解決されていった体験から生まれた。

ダイヤモンドクラブに、地域包括支援センターなどの専門職が参加することがある。専門職が来るからとすずの会メンバーがかまえたりすることはない。「専門職は専門知識をもっている人だけれど、その人の生活についてすべてを知っているわけではない。専門職がかかわる領域は、生活全体の一部」と鈴木さんは言う。専門職も介護者も、ともに要介護者を支えるそれぞれの役割がある。専門職が専門領域のプロであるならば、“世話焼きさん”は生活のプロでなくては、と鈴木さんは考えている。

津田さん夫妻。妻に誘われ、定年後すずの会にデビュー。ご主人（72歳）は自治会長を務める。ミニデイでも活躍するお二人は、すずの会のさまざまな役割を担っている

生活のプロの資質として重要なものは、「豊かな生活志向」をもつことだという。豊かな生活志向とは、自分の身の回りや生活を自分で繕うことができ、そのうえで周囲に気を配ることのできる余裕をもっていること。フラットな関係のすずの会では、一対一のかかわりが大切になる。生活と心に余裕をもち、ふとした気遣いができることが要求される。

専門職とつながるきっかけとなった介護サービス情報誌「タッチ」

すずの会が、多くの介護保険サービス事業所や医療機関、行政機関とつながるきっかけとなったのは、介護サービス情報誌「タッチ」（A 4判270頁・2007年までに5回発行）を出したことが大きい。介護保険の始まった頃、宮前区の介護者の会で、あまりにも介護者が孤立していて情報が届いていない実情を知ったことがきっかけだ。ある介護者の「情報が大事っていうけど、私には何の情報もない」というつぶやきを聞いて、「じゃあ、すずの会で調べてみましょうよ」と始めた。介護者の目線で、実際に事業所をまわって集めた情報誌「タッチ」は、当時またたくまに評判となり、ケアマネジャーの団体や医師会などからも注文が殺到した。2回目のタッチを発行する際には、最初につぶやいた人が介護を終えており、編集の中心になった。

地域に医院が開業するとすぐに訪ね、「こういう人が近所にいるので診てくれない？」と顔見知りになる。今

図2　すずの会の活動をマップにしてみると

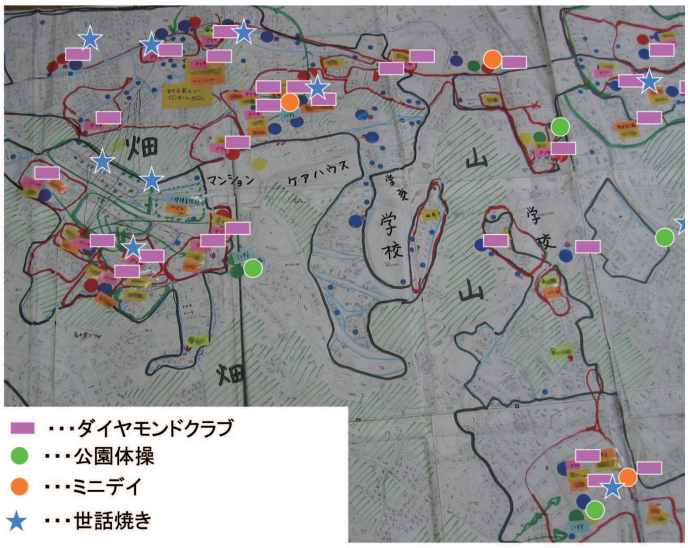


図3　すずの会のアンテナ

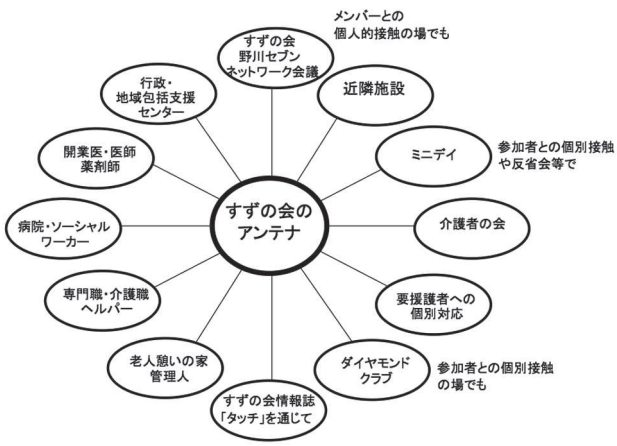


表２　すずの会のメンバーが務める地域の委員等

・川崎市民間活用推進委員会　公的介護施設選考
・川崎市民間活用推進委員会　指定施設管理評価
・宮前区地域包括センター運営協議会委員
・宮前区地域ケア会議運営委員
・地区社協理事（副会長）
・地区社協ボランティア育成部会
・宮前区社協評議員
・野川いこいの家運営委員

（以上委員委嘱）

その他、自治会長、民生児童委員等を担うメンバー多数

では、事業を拡大した病院でもカルテナンバーの10番以内には、すずの会の紹介した人が入っているという。地元の主婦の声というのは大きな武器だ。川崎市は救急車が到着してから病院が受け入れるまで30分以上かかる政令指定都市のワースト１。救急車に乗ったはいいが搬送先がなくて２時間も待つということもある。日頃からつながりのある医師がいることで、いきなり救急車を呼ばないで助かったという事例もある。

行政・社協などとのつながり方

今では、野川地区で事業を始めるなら「すずの会に挨拶へ」と宮前区役所に言われるほど、すずの会は行政や介護保険サービス事業所にとっても大きな存在となっているが、行政や社協などとは、どのようにつながっていったのだろうか。すずの会は、自発的に始めたボランティア団体だったため、発足当初は社協の存在も知らなかったという。どこにも属さない任意団体が「地域になくてはならない存在」とまで言われるようになった理由は、地道に活動をしてきたからにほかならないと鈴木さんは分析する。当初は快く受け入れられることばかりではなかったというが、今では網の目のようにすずの会のメンバーがさまざまな団体の役職を担っている（表２参照）。正体のよくわからない任意団体が「来てください」と声をかけてもなかなか来てくれない。でも、地道に活動していると、どこかから聞きつけて、「協力しようか」と先方からやってくる。そのタイミングが大事なのだと鈴木さんは言う。

住民支え合いマップづくり

すずの会では、数年前から住民流福祉総合研究所の木原孝久さんと一緒に支え合いマップづくりにも取り組んできた。2011年度は厚生労働省の事業として、地域包括支援センターなどとともに「住民支え合いマップづくり」に取り組んだ。

マップづくりの方法としては、①「ちょっと気になる人への関わりシート」にていねいに個人情報を箇条書きで書き込んでいく。①をもとに、②「拡大した地図で居住地を確認し、気になる人の足腰の強さ、歩けるかどうかで色分けされたシールを貼っていく。完成した②の情報は、地区ごと分けて、「要支援・要援護者等とつながっている近所の方の図」など、地域でのかかわり合いを矢印で表した、より実践的な地図へと加工されていく。マップづくりには男性ボランティアも多く、現役時代に得たビジネススキルで資料作成などを行っている。

この日のおもな情報提供者は、自宅でダイヤモンドクラブも開催する手塚みち子さん。常に30人くらいの地

“大物世話焼きさん”手塚さんの情報をもとにマップに書き込む

マップづくりの意義を説明するすずの会代表の鈴木恵子さん。自治体、介護保険サービス事業所、専門職も一目おく存在

立ち上げからのすずの会メンバー
江島　恵さん（66 歳）

失語症グループ「どんぐり会」（野川セブンの最初の１つ）の代表を務める。すずの会代表の鈴木さんとはＰＴＡ時代から 30 年のつきあいだ。

江島さんのミニデイでの役割は、受付。ミニデイの「顔」を担当する。入ってきた時の顔で利用者さんの体調がわかるという。一瞬で身体の変化にも目を光らせる。この日は、爪が伸びている利用者がいた。すぐに担当のボランティアに対応を促した。また、ボランティアのケアにも気を配る。ボランティア仲間の中には家族からの理解を得られない人も多いという。そのため、プラチナーズという集まりを開催するようになった。これは、ボランティアの女性が夫とともに参加する集まりで、バーベキューなどをして楽しむ。「特にすずの会の活動について話をするわけではないけど、顔が見える関係ができることで、家族の理解も深まり、ボランティア活動を支えてくれるようになるんです」。

域の方を見守っているという大物世話焼きさんだ。手塚さんから「気になる人」の名前、住所、電話番号、年齢、同居者、持病や現在の体調などについての情報が発表され、参加者はそれをマップや表に落とし込みながら、自分の知る限りのその人についての情報を話しながら書き加えていく。地域包括支援センターのスタッフからも情報提供が行われる。

マップづくりの目的は「つながりを知る」ことである。単なる情報の羅列にとどまらないよう、その人の人柄、過去のすずの会の活動でのかかわりなどについて、細やかで活発なやりとりが行われる。参加していた自治会長からも「ぜひ、この実態を地域で共有していきたい」との要望が出た。

今回のマップづくりをすることで、野川地区内でまだ把握できていないエリアがあることにも気づいた。6000 世帯を越えた町内会などは、すずの会だけでカバーできない。また、ある団地の中をマップに落とし込んだところ、１つの棟に「一人暮らし高齢男性」「高齢女性と障害がある息子の２人世帯」「寝たきりの人が５階にいる」「障害児のいる家庭」などがあることなどがわかった。ネットワークを生かして、こういった地域にどのように入っていくかは今後の課題でもある。

都会の中にあって、このような支え合いの風土が醸成されたのはどうしてなのか聞いてみた。「必要に迫られたから、困ってなきゃやらないわ」と鈴木さん。2010（平成 22）年には社会問題にもなった無縁社会を特集するテレビ番組ですずの会の活動は、「都会でもこんなつながる関係づくりができる」と紹介された。

事例１

特養から要介護５の夫を自宅へ連れ帰った老夫婦をサポートするチーム H

●事例の概要

平井セツ子さん（80 歳）はアルツハイマー病の夫を在宅で介護をしていた 2006（平成 18）年頃、すずの会とつながる。2009（平成 21）年、ショートステイを利用していた特養に空きができて急遽入所する。2011（平成 23）年暮れより夫重昭さんは体調不良により入退院を繰り返し、2012（平成 24）年２月初旬に胃ろうの造設やターミナルケアについての話し合いが特養から持ちかけられたときに、「自宅へ帰りたい」とすずの会代表に電話が入る。在宅で 24 時間サポートできる態勢をつくるため、すずの会の呼びかけでチーム H が結成され、２月末、H さんは夫を自宅へ連れ帰った。

基本情報

平井　重昭さん（84 歳）　アルツハイマー病、介護度５
平井セツ子さん（80 歳）　妻
家族構成：二人暮らし　子ども３人は近隣に住む
閑静な住宅街にある築 40 年の１戸建に住む

かかわりの経過：すずの会とのつながり

すずの会の元メンバーで手塚みち子さん（75 歳）と平井セツ子さん（80 歳）はご近所で古くからの友人。手塚

重昭さんが特養から帰ってきてはじめてのお茶会。手土産のおはぎのあんこを重昭さんの口に運ぶセツ子さん（左写真）。好物のあんこを２つ分完食した。伴さん（中央写真の左）もかけつけた。鈴木さん（中央写真の右）が、重昭さんにお茶を飲ませる。重昭さんもみんなの顔を見てうれしそうに笑った

さんは、平井さん（気になる人）が夫重昭さん（84 歳）の介護をしていることを知ってダイヤモンドクラブを開くことに。はじめてのダイヤモンドクラブで、すずの会の代表が「何か困っていることはない？」と帰り際に聞くと、「特にありません」と平井さんは答えたという。その後も、何度かダイヤモンドクラブは開催されたが、セツ子さんが何かを訴え出ることはなかった。しかし、「話したくなったらいつでも連絡をちょうだいね」と毎回声をかけていた。

１年足らず経ったある日、「お父さんが布団から出てこない。寝たきりになって困っている」と SOS の電話がすずの会に入る。代表が訪ねると、重昭さんは布団の中から出てこない状態で閉じこもっていた。観察したところ歩けそうだと判断し、「美人がいっぱいいるところに来ない？」と布団の中の重昭さんを説得して、ミニデイへ誘い出した。ミニデイ当日、車いすに乗ってやってきた重昭さんは、ボランティアと過ごした時間がよっぽど楽しかったのか、最後はダンスを踊ってみんなを驚かせた。その後、夫婦で月２回のミニデイに参加するようになり、２年以上が経った。

特養へ入所。その間、ダイヤモンドクラブで夫を病院から連れ帰った伴さんを知る

重昭さんの認知症は進み、セツ子さんが体調を崩したことから、ケアマネジャーが見かねてショートステイを勧め、利用するようになる。ショートステイを利用していた特養の入所を申し込んでおり、特養が空いたのでと連絡がある。それが金曜日のことで「月曜日までに返事がほしい」と決断を迫られ、よく考える間もなく 2009（平成 21）年、特養へ入所となる。

この間もご近所の手塚さんはセツ子さんの様子を気にかけ、相談相手になっていた。あるとき、ミニデイでセツ子さんも顔見知りになった伴宏子さん（75 歳）の自宅で開かれるダイヤモンドクラブに、セツ子さんを誘った。この伴さんの存在が、重昭さんを特養から連れ帰ることの大きなきっかけになった。伴さんは、１年半前にショートステイ中に骨折した夫福一さん（85 歳）を病院から自宅へ連れて帰ってきた経験者だった。自宅へ帰るのは無理だと老人保健施設を勧められたが、反対を押し切った。このときもすずの会が伴さんの在宅介護をコーディネートした。伴さんの家に何度も行くようになり、一人で介護している伴さんの姿を垣間見たセツ子さんは、自分も夫を家に連れ帰ることはできないだろうかと漠然と思うようになる。

「自宅へ連れて帰りたい」とすずの会代表に電話が入る

2011（平成 23）年秋頃から重昭さんは体調を崩し、入退院を繰り返すようになる。

2012（平成 24）年２月、胃ろう造設、療養病床への転院の提案や看取りについての話し合いの申し出が特養からある。

セツ子さんは「このままお父さんをここで死なせたくない」と、すずの会の鈴木代表に「家に連れて帰りたい」と特養の重昭さんのベッドサイドから電話をする。

代表は、「まず、家族でよく話し合って」と伝えた。近くに住む子どもたちの同意と協力は必要不可欠だという判断だ。そして、家族の意見も一致し、すずの会のコーディネートによる「チーム H」が迅速に結成される。

すずの会による「チーム H」の結成

「チーム H」とは、平井さん夫妻の在宅生活を支える仲間と専門職とのチーム名だ。すずの会のコーディネートは以下のものである。これらはすべて日頃から懇意にしている開業医などの専門職に電話１本で手配した。

手塚さん（右）はいつも手料理をもって平井さん宅へ。この日は大根の煮物

毎週のようにお茶会が開かれる平井さん宅。世間話からミニ介護講座になることも

夫を自宅へ連れ帰った先輩である伴さん宅でのダイヤモンドクラブ（右端が伴宏子さん）。平井さん（左から２人目）の顔も。このときの顔ぶれはチームＨのメンバーでもある

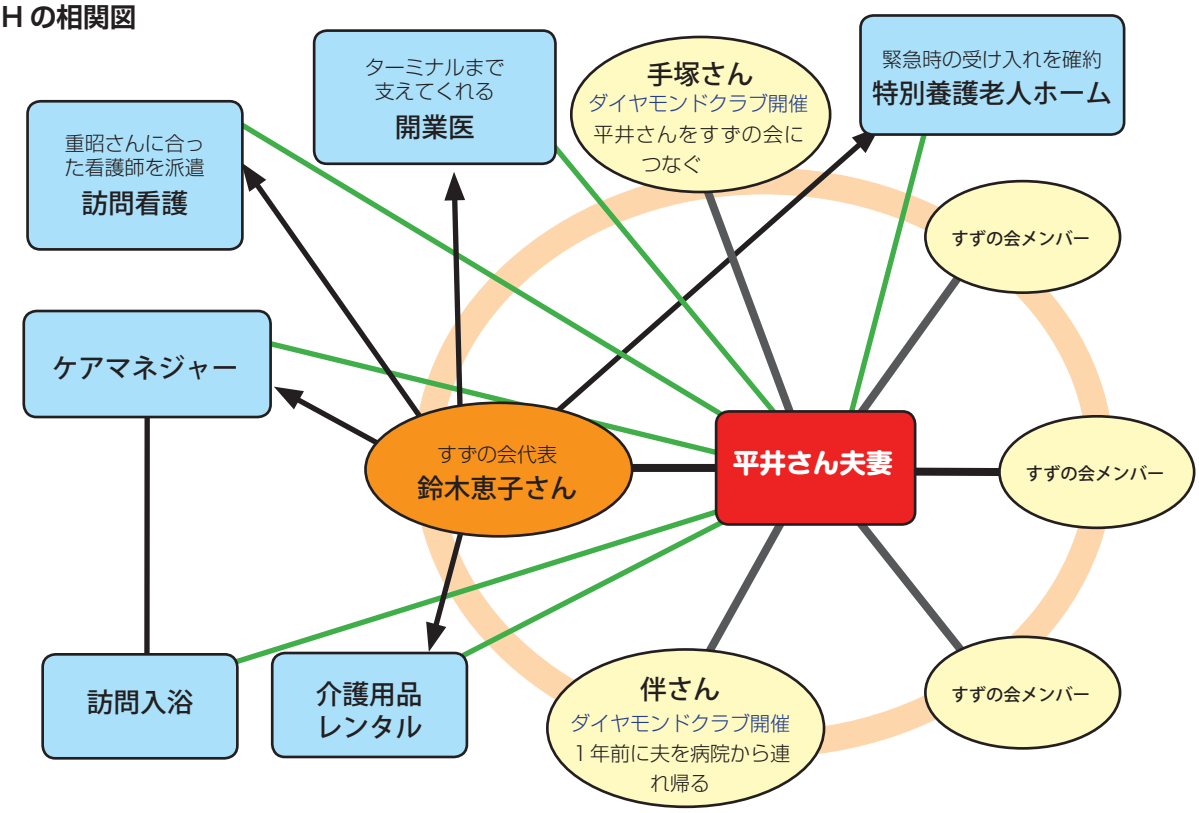
- 24 時間態勢の医療：往診可能で看取りまで対応してくれる医師の確保
- 重昭さんにあった訪問看護師の確保
- 平井さんの状況を理解し、迅速に動けるケアマネジャー
- 特養のバックアップ。優先的にショートステイを利用できるように退所の際に確約
- 必要な福祉用具の手配（使っていない吸引器、おむつを安く入手など）
- 近隣の人が頻繁に出入りすることで、セツ子さんと重昭さんの生活に彩りをつける

現在の平井さんの状況

現在、平井さんの利用しているサービスは、以下のものである。

- 訪問看護：週２回（月・木／１時間）（吸引、浣腸などの処置）
- 訪問入浴：週１回（金）
- 訪問診療（月２回）
- ベッドのレンタルなど

図４　チームＨの相関図



上記の制度によるサービスの利用内容をみると、要介護度５の重昭さんを支えるには不十分な気もするが、平井さん宅にはすずの会メンバーや近所の人たちが頻繁に出入りしている。すずの会メンバーは、重昭さんとなじみの関係であり、なおかつ介護経験者（現在進行形も含む）が多い。つまり、食事介助などはいつでもセツ子さんの代わりができるということだ。取材の日も、先の伴宏子さんがスプーンで重昭さんにお茶を飲ませていた。その間に、セツ子さんは集まった人たちへのお茶の準備をする。こういったことが自然にできるのがすずの会のかかわりである。もし、急にセツ子さんが介護をできなくなることがあっても、すぐに飛んでこれる近隣住民が何人もいるのである。

重昭さんが自宅に戻ってひと月がたった。平井さん宅では毎週のように４～５人が集ってお茶会が開かれている。「もし肺炎になっても病院には連れて行かず、ここで最期を迎えるようにしたいとケアマネジャーとも確認しました」とセツ子さんは集まったみんなに晴れやかな表情で報告する。

伴さんの姿を見て、セツ子さんが重昭さんを自宅に連れて帰ったように、今度はセツ子さんの姿を見た誰かが施設に入っても家に帰ることができることを知っていく。

事例２

虐待を疑われた息子が すずの会の貴重な存在になる

2007（平成19）年、地域ネットワーク会議野川セブンで３か月に渡って話題にのぼる親子がいた。顔つきの険しい息子が認知症の母親を介護しているらしいが、虐待をしているのでは…と。「一緒に訪問してもらえないか」と地域包括支援センターから頼まれ、すずの会代表の鈴木恵子さんが鈴木宏康さん親子を訪ねることになる。宏康さんは、認知症で歩きまわる母親の横で精気のない顔で座っていたという。徘徊のはげしい母親の介護のため40歳代半ばで退職、一人で昼夜介護をしていた。このままではこの親子は限界だと感じ、なんとかミニデイへ誘い出した。

ミニデイでは、ボランティアが母親芳野さん（83歳）にしっかり寄り添い過ごすと、家では見られなかった笑顔が出た。それを見た宏康さんは、「あのお袋が笑うなんて」と衝撃を受ける。以来、バスハイクやダイヤモンドクラブにも参加するようになり、１年後には、自宅でシングル息子と男性中心のダイヤモンドクラブを開くようになる。

60歳代以上の女性が多いすずの会の中にあって、パソコンにも詳しい宏康さんの存在は大きい。長く会社生活を送ってきた宏康さんの社会常識もまた、専業主婦の多いすずの会にとっては貴重なご意見番になるようだ。

一人では歩けなくなったため外出の機会が減った芳野さん親子を訪ねる鈴木恵子さん

チームＨにも登場した伴さん宅で開かれたダイヤモンドクラブ。鈴木宏康さん（右から２人目）も芳野さん（右端）と一緒にやってきてくつろぐ